

今年から名称を「筑前木屋瀬祇園祭」に

さて「寄せ太鼓」の発刊以来、木屋瀬祇園に「より多くの皆様によりご理解を深めて戴き・より親しんで戴こう」との思いで、祇園行事に関する事など、私の拙い識に私見を交えて毎回お伝えさせて戴いて居りますが、今回お伝えするのは祇園祭の正式名称が変更された事でございます。

奇しくも昨年の「寄せ太鼓二十一年」で「筑前木屋瀬祇園宿場祭」の行事名称の由来をお伝え致しましたが覚えて居られますでしょうか？其の昭和三十八年より平成二十年までの四十五年間に亘り親し

つぎましては、昨年お伝えした「筑前木屋瀬祇園宿場祭」の行事名称の由来につき、今回は今一つ深く掘り下げて考えてみたいと思っております。

■今年から名称を「筑前木屋瀬祇園祭」に

須賀神社氏子(木屋瀬住民)待望の祇園祭が七月十一日・十二日に執り行われます。

本年度の栄えある山笠当番町は一番赤山笠(真名子五十九世帯)・二番青山笠(改盛町二十六世帯)が務めますが、過日六月八日の第一回実行委員会に於いて両当番町の総取締役へ山笠総取締役表札も授与され、祇園祭に向けて準備に余念の無い処でございます。

日時 七月十一日(七)・十二日(日)

筑前木屋瀬祇園祭

(旧称 筑前木屋瀬祇園宿場祭)

思いも新たに、更なる発展を



長崎街道 宿記念館 広報部
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号 (〒807-1261)
TEL 093-619-1149 FAX 093-617-4949



「伝統存続への思い」

思い起こすに「筑前木屋瀬祇園宿場祭」となった昭和三十八年と云えば、石炭産業の衰退と運命を共にし経済的に疲弊していた此の木屋瀬が、筑豊電鉄と国道200号線の開通などにより北九州工業地帯の郊外型住宅地として変貌を始める黎明の頃ですが、元来「木屋瀬祇園山笠」は当番町の単独運営(山笠制作から運行まで)であった為、経済的にも人的要素から「祇園山笠」の継続が困難な状況となり途絶えようとした時期でございました。

「全町民参画イベント」に発展

処で、まちづくりイベントである「筑前木屋瀬宿場まつり」とは、今から二十年程前から約十年の間、当地・木屋瀬では、先の北九州市・

そこで事態を危惧した当時の先人達は「木屋瀬祇園山笠」の伝統存続の為、木屋瀬全町で協力する為の方策として実行委員会方式を執り、折しも前年の昭和三十七年福岡県無形民俗文化財に「木屋瀬の盆踊(通称「宿場踊り」として指定された事から「宿場踊り」の普及と活用と云う願いをも込め「筑前木屋瀬祇園宿場祭」と名付けられたものではなからうかと推し量ると共に、此の様な先人達の郷土・木屋瀬への熱き思いから為る創意工夫と努力が礎となり、其の後の北九州市・ルネサンス構想・長崎街道整備計画へと発展し、今日の「木屋瀬まちづくり」が在ると云う事を後進としては忘れては為らな

ルネサンス構想・長崎街道整備計画の下(「町並み保存」かと思えば「街づくり」という風に、行政計画の進捗都合に合わせた風が闇雲に吹き荒れた頃(筑前黒崎宿場まつり)に遅れる事二年後に、当時絶頂期であった「宿場木屋瀬街づくりの会」により行政の肝煎りで行われられたものですが、回を経るごとに単独主催が困難となり、第八回目にして「木屋瀬自治会」との共催、第九回からは現在の地元八団体で結成する実行委員会主催となつて以来、木屋瀬住民の「自主企画」(「自主運営」)する全町民参画イベントへと成長し現在に至っております。

新の精神を以ての改称と解し納得する処でございます。

先人達も安堵して居られることかと存じます。

最後に、本年度祇園行事の執行にあたり、実行委員会本部はもとより、本年度祇園山笠両総取締役以下山笠関係者一同、先人の築き上げて来た木屋瀬祇園の歴史と伝統の重みを踏まえ、厳肅なる規律を以て、盛大、且つ、勇壮に執り行う所存でございますので、氏子の皆様方にもご協力の程、何卒、宜しくお願い申し上げます。

平成二十一年度筑前木屋瀬祇園祭実行委員会 副実行委員長 柴田泰助

総会無事終了

平成二十一年四月二十四日、こやのせ座におきまして、第9回北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会総会が開かれました。

平成二十一年度事業報告・決算報告・平成二十一年度事業計画案・予算案が議案として審議され、すべて承認されました。

役員紹介

理事長：高宮 歳継
副理事長：水上 裕
運営事務局長：野口 靖彦
広報部長：高崎 尚康
広報部会長：千々和 裕
郷土史料館運営部長：梶原 正之
こやのせ座運営部長：柴田 泰助
こやのせ座運営部理事：船川 勇一
監事：小河内 勝次
監事：松尾千代子



今回は、娯楽性を取り入れた新企画(木屋瀬映画祭)のお手軽料金五百円と演目(女侠一代)が人気を博し、昼夜の二回公演で五百人以上を集客した事もあり、五月連休の四日間に亘る芸術祭の開催期間中では延べ千人を超える方々に参加・集客戴きました。

内容的には、前夜祭を兼ねた恒例のダンスパーティーは定着し、木屋瀬の文化度を内外に示し発信する四つの基幹企画(筑前木屋瀬八幡伝説・伊藤小左衛門(長崎街道筑前六宿フォーラム)(記念シンポジウム・鉄の都は甦るか?)(筑前郷土芸能連絡会議)については、回を重ねるごとに向上が窺え、今後益々の発展性が期待される展開となって来て居ります。

特に(長崎街道筑前六宿フォーラム)を母体とする(長崎街道・筑前六宿開通四百周年準備委員会)の活動が花開き今や木屋瀬を中心に六宿住民の連携・協力する活動が六宿全体へと着実にひろがりつつある状況にあります。

そこで、今回の(木屋瀬芸術祭)を振り返るにあたり脳裏に浮かぶ言霊がございます。皆様、須賀神社境内の元禄時代に建立された祇園社鳥居の傍らに、今年になって(祝・北九州市誕生)と云う石碑が建立されているのをご存知でしょうか。



これは、岩尾四十三郎(岩井屋不彫)さんと云う、今日ある当地木屋瀬「まちづくり」の礎を築かれた先人が、北九州五市合併・北九州市誕生の慶びを詠まれた句碑でございまして、其の岩井屋不彫さんの(郷土・木屋瀬への熱き精神)と(気宇壮大な気風)に学び・習い・続こうと云う志を基に活動を続ける不肖私の主宰する(筑前木驛・茶目っ気一輪)と云う団体が、活動一五周年の節目として、岩井屋不彫さんの功績を讃え、と共に後進へのメッセージとして建立させて戴いたものです。

手前味噌ながら、私ども(こやのせ座運営部会)の活動が、筑前六宿と云う共有の歴史的文化財産を通じて六宿間の垣根を払い、筑前六宿全体へと着実にひろがりつつある状況下、私の脳裏に浮かぶのは此の句碑にある(梅が香や・垣根はらひし・ひろき庭)と云う言霊でございます。

それでは(こやのせ座運営部会)の熱き精神(思い)から為る活動が、今後更に、長崎街道と云う共有の歴史的文化財産を通じて、長崎街道二十五次の垣根をほらい、長崎街道沿線住民の連携・協力する気宇壮大な活動へと広がり発展して行く事を秘かに目論見ながら今回寄稿の纏めと致します。

最後に、四日間に亘る開催期間と準備・片付けを合わせれば一週間以上に及ぶ(運営)ならびに娯楽性から学芸的要素まで多岐多彩に織り込む企画実践の為の一ヶ月以上に及ぶ事前準備活動(企画・広報・渉外)にご出仕戴きました(こやのせ座運営部会)のボランティア仲間へ深く敬意を表しますと共にご協力戴きました皆様方に心より感謝申し上げます。有り難うございました。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助



こやのせ座運営部会の年度末・最終を飾る恒例行事(親子お能教室)と(こやのせ座・能)が去る事三月七日に執り行われました。

今回(親子お能教室)へ木屋瀬中学吹奏楽部から多くの参加協力もあり(こやのせ座・能)と合わせ約三百名の集客で(こやのせ座)は賑わいました。

こやのせ座運営部会長 柴田泰助



版画で歩く長崎街道 二川秀臣展を開催しました

宗像市在住の二川秀臣さんが制作された版画「長崎街道」と「唐津街道」の中から57作品を出品して頂きました。木屋瀬宿をはじめ街道ぞいの名所旧跡や町並みを描いた旅情あふれる版画作品に多くの方が魅入っておられました。皆様のご来館、誠にありがとうございました。

【期間：平成21年4月25日(出)～5月31日(日)】

職員紹介 長崎街道木屋瀬宿記念館長 村崎孝二

4月から記念館に着任しています。木屋瀬は江戸時代の宿場町の面影を残す町並みや、当時の貴重な史料が保存されており、北九州市を代表する歴史・文化地区です。また、地域には当時からの祭りや行事が継承され、今も生活の中に定着しています。

これらを地域の人と一緒に守っていくこと、郷土愛を育むこと、さらに市民の財産である木屋瀬をもっと多くの人に知ってもらい訪れてもらうことが私の使命と思っています。どうぞよろしくお願い致します。

シリーズ 筑前木屋瀬宿 神仏めぐり

第16回 浄土真宗 白髪山西元寺 遷座法要

です。また、大事なポイントでは、「受け念仏」と言って聴衆から自然に念仏が生まれる仕掛けがあります。この節談説教は、日本の話芸のルーツと言われ、日本の伝統芸能に多大な影響を残しています。

西元寺は、長崎街道木屋瀬宿記念館から歩いて五分くらいの、祇園町通りに在ります。「塀の白いは西元寺」と木屋瀬カルタに歌われていますが、今はその塀はありません。実は西元寺の本堂は江戸時代の文久元年（1861年）に再建された建物ですが、百四十有余年の月日が経ち、痛みがひどくなり、この度解体して新しく新築されるようになりました。その解体準備の為、塀が崩されたのです。本年から解体が始まり、平成二十四年に完成の予定です。



高座での節談説教

本年三月、本堂の解体法要と、御本尊を仮安置場所へ移動する「遷座法要」が勤められました。当日は、たくさんの門信徒が本堂を埋め尽くし、読経と念仏の中、阿弥陀如来像が内陣から御輿しに載せられ、本堂、境内、そして庫裏に仮安置されました。遷座法要に先立ち、現本堂での最後の彼岸法要として、大変珍しい「節談説教」が勤められました。節談説教というのは、江戸時代から昭和三十年頃まで、浄土真宗の法座で盛んに勤められた説教の形態ですが、現在はほとんど行われていません。現本堂の最後の法要として勤められた事は、大変意義あることでした。現在の説教は、黒板を使つての学校の授業のような形態ですが、この説談説教というのは、「高座」という舞台上がり、節をつけ、聴衆の情感に訴える布教の方法で、親鸞聖人の布教のご苦労や忠臣蔵、平家物語など、聴衆が知っている物語を題材として、仏教の教えを分かりやすく感動的に語るの

す。例えば、寄席では舞台と言わず高座といいますが、まさに節談説教で使われる高座から来た言葉です。また、寄席等の楽屋で芸人さんが「今日の話はウケたね」という話しをするようですが、これも節談説教の受け念仏から出た言葉です。日本の社会や芸能に多大な影響を与えた節談説教ですが、今は語る人が大変少なく絶える寸前でした。しかし浄土真宗の宗祖親鸞聖人の七百五十回大遠忌を前に、復興の動きが出て、西元寺でも五十年ぶりに勤められました。今回勤められた、「高座」は、約百年前の明治四十三年、親鸞聖人の六百五十回大遠忌の本山参拝記念として奉納されたものです。また、境内の鐘楼に釣られていて、梵鐘は五十年前の七百回大遠忌の参拝記念として奉納されています。どちらにも、故人とされた多くの木屋瀬のご先祖の方々の名前が記されています。来る平成二十四年には、親鸞聖人の七百五十回大遠忌の法要が京都の西本願寺で営まれますが、奇しくも同じ年に、西元寺も新しい本堂が完成します。仏教の教えに「速く宿縁を喜べ」という言葉があります。宿とは、過去のことです。寺には永い歴史と伝統の縁が脈々と受け継がれている事を感じずにはいられません。

花曇り夢の続きに浄土あり
土塀なき寺吹きぬける涅槃西

(本町 野口靖彦)

置かれていた。伝馬には、本馬、軽尻、乗掛とあり、本馬には荷物を運ぶ馬、軽尻は人を乗せる馬、乗掛は人を乗せ荷物も乗せる馬であった。人足の荷物は五貫目までが定まりであった。六貫目になると「一人二分」の賃銭となる。つまり貫目が、賃銭算定の基準であった。運賃は、一里につき馬三十二文、人足六十文とおよその定まりがあったが、筑前六宿街道だけは、難所が多くて人の往来もはげしく、人馬助郷が多くて村々が困窮していると言う事で馬四十一文、人足二十一文となっていた。

飛脚には、幕府が出す継飛脚、藩が出す大名飛脚、宿問屋が出す町飛脚があった。

継飛脚は、通常二人で組み、一人が状箱をかついで走り一人が先駆する、夜間は高張り提灯をかざして先駆する、しかも昼夜兼行で、定時に届けねばならぬ厳しい掟があったので自然に荒々しい振舞いも出ていた。

東海道中膝栗毛の弥二さんは、三島の宿で「死んだ方がよい」と言っているほど、状箱を顔面に当てられたが、飛脚は権威がましい態度で、委細かまわず駆け去っている。

大名飛脚は、藩での運営に行き詰まり、町飛脚に業務を依存して姿を消した。

木屋瀬問屋場は、どんどん充実発展し、町飛脚は明治四年に、木屋瀬郵便所として新設された。福岡県内では九番目である。

尚、福岡県内の郵便所設置順位は、一番久留米、二番柳川、三番小倉、四番八女、五番芦屋、六番行橋、七番香原、八番赤間、九番木屋瀬であり、福岡は十四番目、直方は三十番目である。

【柴田豊廣遺稿集】より

昔話

伝馬飛脚と木屋瀬

徳川家康は、公用で伝馬使用する者に、伝馬御朱印状や御証文を出して、住民の犠牲によって、必要人馬を次の宿駅まで、無賃で使用出来るようにした。

これに対して、地子の免除や拝借金はあったが、負担に対しあまりにも小額であった。

その上に、ご馳走人馬と言ひ無賃人馬を増加提供させられ、大きな負担を生ずる事もあった。その為宿駅では、旅行者や商人等の荷物の輸送等で利益をあげ、犠牲から起こる負担をつくっていた。

木屋瀬宿は長崎街道と筑前内宿街道と、大名行列の客があり、公的な無料奉仕はあったとしても、宿町の運営は良く、活気に満ちていたようである。

但し、人馬助郷の提供負担は多くて、あまり恩恵のない地区では「役銭」と言ひ人馬助郷を出すかわりに、金子を出す所が、だんだん多くなって来た。

その為一方では、常に人足を集めておき、宿駅が必要とする人足を提供できる人足請負業者が出来た。業者は流れる者であろうが無宿者であろうがおかまいなしに雇い、人足部屋に住まわせた。これが雲助と呼ぶ集まりである。

悪人のように思われた、離れ雲助は峠や坂道等に屯していたが、これも総動員するほど人足を必要とする事もあり、追い払ったりはしなかったようである。

川筋は 大きく晴れて 風すゞし

木屋瀬宿の間屋場は、本町の野口薬局の所に在り、飛脚や人足や伝馬の義務があった。問屋場に向かい本陣も在り、本町内には何かと繁多であった為か、伝馬の厩(うまや)は下町の和田金物店付近に

扇天満宮は約660年前の観応年間(1350年~1352年)以前から鎮座されていて、ご祭神として菅原道真公が祀られています。

道真公は優れた学者であったことから「学問の神様」として永く人々の信仰を集めています。

学神祭は天満宮の神使である牛と道真公が梅を愛したことから、毎年新年生の男子が「うし」女子が「うめ」の習字を奉納し、学業上達を祈願するものです。

本年も小学校の運動会と重なりましたが、5月24日(日曜日)午後4時から扇天満宮において、学神祭の神事が執り行われました。男子六名、女子十名計十六名の新年生は父兄の見守る中、そろいの法被をはおり、神前に正座し、玉串奉典には一同、神妙に拍手をうち学業向上を願いました。

式典終了後、子供達の手による記念植樹が行われ学神祭の行事が終了しました。同日の午後7時より扇天満宮の例祭の神事が執り行われ、関係各位の御参列により、厳かに進められました。

関係者の皆様のご協力により扇天満宮祭、学神祭を無事に終了することが出来ました。心より御礼申し上げます。

中町町内会長 高崎尚康



▲みんなで記念の写真撮影



▲子供たちも真剣な表情で祈願

扇天満宮学神祭

道真公のもとで学業向上を祈願



木屋瀬宿人馬方徳平 同宿問屋左七 御届申上ル口上之覚 其の一

木屋瀬みちの郷土史料保存会 松尾 良美

嘉永・安政年間に木屋瀬宿で休泊する幕府役人や九州一円の名門一門の諸大名一行の宿割や人足と荷駄を配する町方が徳平と左七であった。

中間の底井野に遠賀・鞍手両郡の郡役所が置かれ、連名で差し出された文章が左記に掲載された覚書である。「口上之覚」とは、口頭で申し上げることを書き記してお知らせ致します、との意味である。

公儀役人の筒井肥前守とは、幕府の役職である大目附であつて、幕府役人や諸藩の政務を監察し監督する役である。古賀謹一郎は幕府に召抱えられた儒学者である。

木屋瀬宿人馬方徳平 同宿問屋左七
御届申上ル口上之覚

筒井肥前守様 古賀謹一郎様当宿御昼休 御出会中御途中共不念筋無御座御継立無御滞相済申候此段御註進可申上候宜舖御聞通被仰付可被為下候 以上

嘉永六年丑十二月 木屋瀬宿人馬方 左七
遠賀鞍手 御郡 人馬方 徳平
御役所 同宿

この両人は、幕府の勘定奉行(老中の支配に属し天領(幕府の直轄領)の郡代や代官を監督して、年貢の徴取・訴訟・幕府財政の運営に当たる役)の川路聖謨と共に、長崎表に來航したロシア国使節の応接掛として派遣された。

幕末の嘉永年間には、日本近海に異国船が相次いで出沒して沿岸を測量したり燃料や飲料水を要求してきたが、三百五十数年にわたる鎖国の夢を破る驚天動地の大事件が発生。

嘉永六年六月三日にアメリカ軍艦四隻を率いたペリー提督が浦賀沖に停泊して大統領の国書を手交したのである。使節ペリーの態度は強硬で長崎への回航を拒否した上、国書の受理を拒めば上陸して江戸に赴き、自ら將軍に手交すると威嚇し、明春の來航で開国と通商を迫って江戸湾より去った。

江戸市中では「黒船現わる!!」で騒擾を極め、幕府でも攘夷か開国かの是非で議論が二分した。海岸防備のため幕府や各諸藩では砲台を築いたり、ペリーが手交した国書への返書について幕府の老中は、諸藩や旗本に対して意見を求める有様であった。

ところが、ペリーが去って僅か一ヶ月後の七月十八日には、ロシア国使節プチャーチンが率いる艦隊が長崎に來航して開国を求めてきた。

今回の幕府の対応は、穩便に事を処理しようとして国書の受理を長崎奉行に命じ、

国書の内容である国境の確定(千島列島と樺太)と和親・通商条約を結ぶことと要求があるので、直ちに接係一行に、長崎でロシア側との会談を行わせるようになった。十月三十日に接係一行は江戸を発足して往路は中山道にとつたが、総勢三百人に及び携行する荷物も多量になって、道中の各宿場での人馬継立が過重にならぬよう配慮して、筒井肥前守古賀謹一郎と川路聖謨一行は二手に分かれて時間をずらせて江戸を出ている。

十二月二日に下関に着き四日に筑前入りで、木屋瀬宿で休息した事が道中日記に記されている。

異国との会談を行う接係一行を送迎する宿場にとつては、長崎街道の通行で一番格別の高い長崎奉行以上の人馬継立なので、木屋瀬宿の代官町方役人達は、那役所と連携をとって黒崎宿到着の時刻を飛脚で注進させたり、一行の道中の状況や先触(前もって街道の宿駅に準備を知らせる役)を郡境迄に遠見役(先に見届けて知らせる)を走らせる。また宿場内の送迎と次の宿駅飯塚迄の人足や馬の手配等々で遺漏がないよう気を配つたと思う。

「...当宿御昼休 御出会中御途中共不念筋無御座御継立無御滞相済申候...」要約すると、木屋瀬宿で休息中の役人方が出揃い(出会)や飯塚宿迄の人馬送り(継立)は、不都合もなく(不念筋無御座)無事に済んだ事を(無御滞相済)報告致しますとの意味。

こうした一件落着の覚書だが、この接係一行が長崎での用務を終えて、江戸に帰る途中木屋瀬宿での人馬継立で不祥事があったので次号で記述することにする。